西南学院大学　人間科学論集　第 20 巻　第 2 号　　65 ― 93 頁　2025 年 2 月

西南学院高等学校と人間科学部の協働プログラム

河谷はるみ・倉元綾子・井上久美子・梵真沙子 [1]

A Report of a Seinan Gakuin Joint Program Conducted by the High School and the Faculty of Human Sciences

Harumi Kawatani, Ayako Kuramoto, Kumiko Inoue and Masako Soyogi

Ⅰ．はじめに

一般的に高大連携とは、高等学校と大学間におけるネットワークの構築である。多くの中等教育機関と大学は、長年にわたって高大連携と接続を積み重ね、中学・高校と大学との相互理解と協働の進展を図り、両者に資する取り組みの充実をはかってきている。

西南学院では 2023 年度に初めて、社会福祉学科の学生たち（西南学院中学校・高等学校卒業生）が発起人となり「学生主体」の西南中高大連携講座を実施した。これは、西南学院中学校・高等学校と人間科学部社会福祉学科が連携して行ったものである（西南学院大学、2023；西南学院大学、2024b；河谷、梵、2024）。

2024 年度は、西南中高大連携を「継続的」に実施することや連携講座を通して、高校生に大学での学びと進路選択の幅を広げることが大変重要と思い、西南学院大学「人間科学部」に拡大して実施した。

---

[1] 西南学院中学校・高等学校教諭（数学）、人権・「同和」教育委員会

西南学院は創設者 C.K. ドージャーが残した建学の精神「キリストに忠実なれ」に基づき、真理の探求および優れた人格の形成に励み、地域社会および国際社会に奉仕する創造的な人格を育てることを使命としている（西南学院大学）。

中学校・高等学校では、チャペルでの多様な講話や聖書の授業を通じたキリスト教教育が行われ、自らを見つめ、世界や社会の諸課題についても関心を持ち、考える機会を提供している。生徒たちが「一人ひとりにかけがえのない存在としての価値が与えられている」ことを認識し、神に愛されている者として他者を尊重し、喜びや悲しみに共感して生きる「新しい人」「平和をつくり出す者」となることを目的としている（西南学院中学校・高等学校）。

一方、人間科学部は児童教育学科、社会福祉学科、心理学科の 3 学科で構成され、人間に関する諸学問、および幅広い教養を学ぶことによって、人間についての深い理解、他者を受容し共感する能力、ならびに主体的思考力と総合的な判断力をもった個人を育成することを目指している（西南学院大学、2024c）。

2024 年の高大連携プログラムの人間科学部での実施に向けて、まずは「人間科学（部）とは何か」という問いを立て、学部創設時の原点に立ち戻り、各学科の歴史を確認したうえで共通テーマ、コンセプト、目的を整理した。所属する学科が異なっても、同じ「人間科学部」の教員として、学部の理念や 3 学科に共通する「ものの見方・考え方」を模索し、協働プログラムの軸を立てていった。その結果、協働プログラムの具体的な内容は、模擬講義、グループワーク（学生生活について）、車椅子体験とし、2023 年度連携講座発起人の学生たち（西南学院中学校・高等学校卒業生）の協力も得ながら準備を進めた。

本稿では、はじめに西南学院高等学校と人間科学部の協働プログラムの実践を報告する。昨年度の同プログラムにおいて、高校生が「大学の先生や学生から直に話を聞くことができること」（河谷、梵、2024）を最大の意義に挙げていたことから、学部として実施する今回のプログラムの意義を再確認し、「人間科学（部）とは何か」についても考えていきたいと思う。

（河谷はるみ）

Ⅱ．西南学院高等学校と人間科学部の協働プログラム

2024 年 8 月 22 日（木）14：00 ～ 16：00（休憩を含む）、西南学院大学教室（3 号館 403 室）で 2024 年度「西南学院高等学校と西南学院大学人間科学部の協働プログラム」を実施した。この基盤は、昨年度の西南学院中学校・高等学校と西南学院大学人間科学部社会福祉学科の西南中高大連携講座である（西南学院大学、2023；西南学院大学、2024b）。

協働プログラムの目的は「①人権・『同和』学習と繋がりの深い人間科学部とジェンダー・人権、社会福祉、心理について学び合う、②大学とはどういうところなのか、どのようなことを学ぶのか等について、大学に実際に行き、ゼミを受けることで、将来についてより深く学ぶ、③オープンキャンパスとは違う形式で、個別具体的に実施できるように計画する」である。

共通テーマを「ひとを知る、ひととの関わりを考える」とし、コンセプトを「知らない世界を知る、多様性を理解する、将来について考える」とし、板書した（図Ⅱ-3）。また高校生には入学案内とレジュメ、必要に応じて資料を配布した。

当日は、人間科学部に興味と関心のある西南学院高等学校 1 年生から 3 年生の計 15 名（高校教員 3 名）が参加した。

教室は、可動式の机といすを用い、高等学校と同じスクール形式に設営した。

模擬講義（各 20 分）では「人間科学（部）とは」（後述）を意識しながら、はじめに入学案内を用いて、学科の特徴や資格・免許、具体的にどのようなことを学ぶのかを説明した。次に、教員の専門・研究分野を中心とした講義を行い、後半のプログラムであるグループワーク（30 分）に繋げた。

次節では、河谷（社会福祉学科教授）と井上（心理学科教授）の模擬講義の概要をまとめる。倉元（児童教育学科教授）の模擬講義には「人間科学（部）とは何か」も含むため、第Ⅲ章とした。

内容：
模擬講義①　「教育・ジェンダー・人権」　倉元綾子（児童教育学科教授）
模擬講義②　「社会保障・障害者差別解消法」　河谷はるみ（社会福祉学科教授）
グループワーク（学生生活について /3 グループ編成）
※担当：社会福祉学科 4 年生
田代学部長　ご挨拶
休憩
車椅子体験　※担当：社会福祉学科 4 年生
模擬講義③　「人間の『心』を学ぶ」　井上久美子（心理学科教授）
学びのふりかえり

1. 模擬講義

(1)「社会保障・障害者差別解消法」　河谷はるみ（社会福祉学科教授）

社会福祉学科は、「社会保障・障害者差別解消法」というタイトルで模擬講義を行った。プログラムのテーマに「多様性」を挙げていることや、井上（心理学科教授）が、西南学院大学学生相談室主任でもあることも念頭に置いて、模擬講義の内容を検討した。

講義の最初に、挨拶（礼儀）と自己紹介を行った。自己紹介では社会保障論（法律や制度）が専門であること、「大学で学ぶ」とはどういうことか、高等学校と大学での学びは何がどのように違うのか（主体的に学ぶ姿勢、問いを立てる力など）に力点を置いた。この時間は、高校生も「大学の先生」に対するイメージを持っているため、高校生と大学教員間で緊張感のある時間である。今回は高校 1 年生から 3 年生の混合クラスであったため、社会保障論のなかで、特に高校生の生活に身近でわかりやすいテーマを取り上げた。

高校生は「社会福祉＝介護」というイメージを持つことが多い。そのため、入学案内と配布資料（図Ⅱ-2）を活用して、社会福祉の領域や職域は幅が広いこと、私たちの社会や生活と深く関わっていることをわかりやすく説明した。

そして、2024 年 8 月のオープンキャンパスでは、社会福祉学科の学生だけでなく、卒業生（西南社福の輪／社会福祉学科同窓会）の協力を得たことも紹介し、将来の職業選択への情報にもなるように、高校生とともに社会福祉を学ぶ意義を考えた。なお、協力学生たち（社会福祉学科 4 年生）も卒業生が活躍しているという話に聞き入っていた。

社会福祉学の理論と実践、ソーシャルポリシーとソーシャルワーク、という枠組み（図Ⅱ-2）は、やさしく解説した。自分たちが生活している社会の動向、具体的には人口減少、地域共生社会、多文化共生社会、こどもまんなか社会というマクロの視点から、徐々に、「地域とは？個人とは？」と問いかけ、「社会福祉・社会保障とは？」という核心に斬り込んだ。

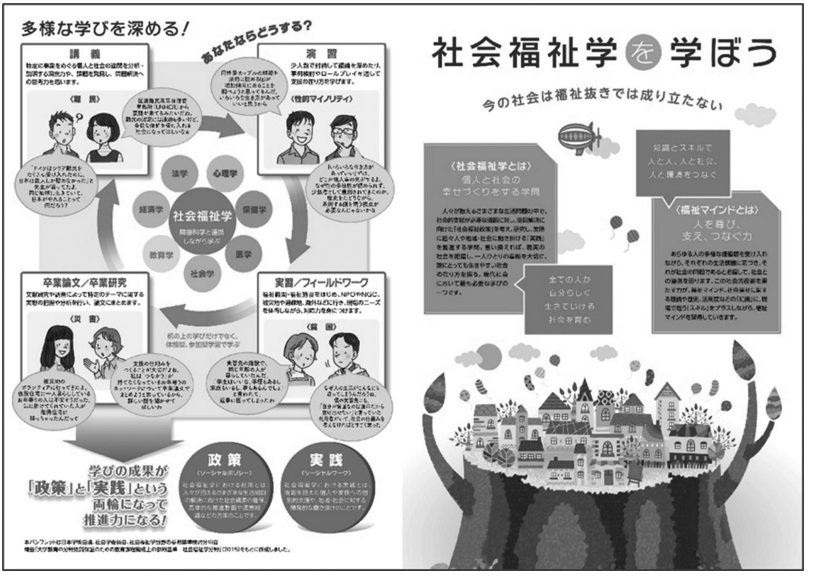
2024 年度社会政策論（河谷）の授業では、UR 都市機構と連携し、学外フィールドワーク / クールシェアカフェ（福岡市早良区原団地）を行ったことを説明した。高校生は「カフェ」という言葉を新鮮に受けとめ、質問してきた。この反応から、現実に起きている社会問題を「暮らし」と結びつけ、法律、行政、経済、経営、情報など、総合的かつ多角的な視点でどのように解決したらよいのか考えることの重要性を、改めて実感した。

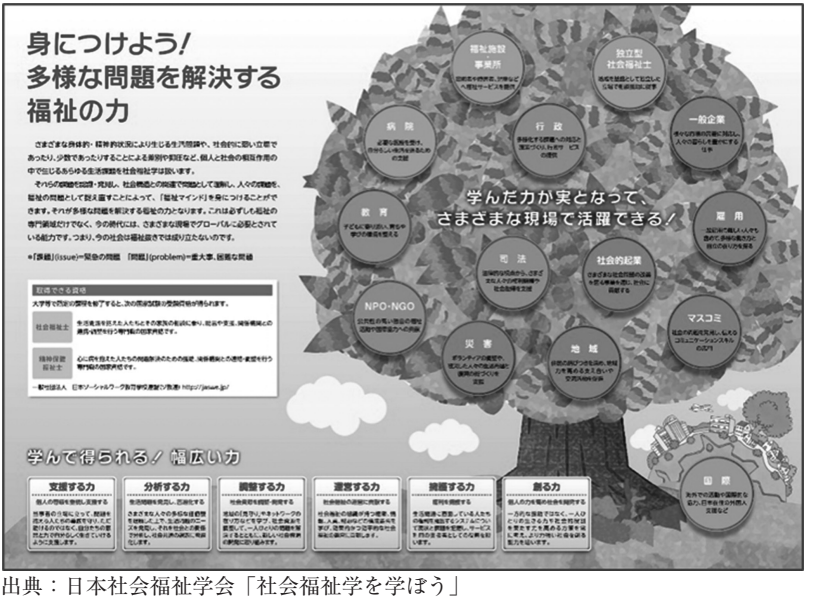
障害者差別解消法は、共生社会（ともにいきる）と合理的配慮の義務化をキーワードに、パワーポイント（図Ⅱ-1）のイラストを用いて「何がどのように？」と、高校生が合理的配慮の具体例を考えられるように工夫した。この部分は、井上（心理学科教授）の模擬講義に繋げることを意識した。また大学 1 年生で海外ボランティア・ワークキャンプに参加した学生（社会福祉学科 2 年生）がオープンキャンパスで「幸せの形は人それぞれ」をテーマに発表した内容を紹介した。西南学院大学は国際性豊かで、大学全体でボランティア活動に取り組んでいるなどの特徴を持っている。そのような西南学院大学で社会福祉学を学ぶ意義を再度強調して、総括した。

図Ⅱ-1　模擬講義（配布レジュメ）

（河谷作成）

図Ⅱ-2　社会福祉学を学ぼう（配布資料）





出典：日本社会福祉学会「社会福祉学を学ぼう」
https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/ssw_learn_print.pdf
（最終閲覧日：2024 年 11 月 8 日）

図Ⅱ-3　模擬講義　「社会保障・障害者差別解消法」
河谷はるみ（西南学院大学人間科学部社会福祉学科教授）

（許可を得て掲載）

(2)「人間の『心』を学ぶ」　井上久美子（心理学科教授）

心理学科からは、“人間の「心」を学ぶ”というタイトルで模擬講義を行った。倉元及び河谷と同様に、「自己紹介」のスライドに掲載しているトピックに沿って、模擬講義を行った。今回の高大連携講座のテーマの一つとして「多様性」が挙げられていること、河谷の模擬講義において障害者差別解消法が取り上げられていたことから、本学（大学）における合理的配慮の提供に関する体制を高校生に知ってもらうことに意義があると考えられた。

そこで、模擬講義の最初のテーマとして「大学における合理的配慮」を取り上げ、2021 年の障害者差別解消法の改正、それに伴う私立大学の合理的配慮の法的義務について、説明を行った。そのうえで 2024 年 4 月から始動している本学の合理的配慮の提供の体制について、ホームページに公開している「修学場面に係る合理的配慮の提供について」をスライドに映写し、本学の合理的配慮の提供フローについて説明した。

続けて、心理学科での学び（ホームページに公開している 2 つの柱と多様な学び）について説明した。その後、「心理学は幅広い！」というタイトルで、

本学の心理学科で学ぶことができる主な心理学の分野（認知心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、スポーツ心理学）を紹介し、心理学の学びの幅広さを説明した。

さらに、話者が取り組んでいる研究の紹介をした。具体的には、心理学における「からだへのアプローチ」の一つである動作法（成瀬 ,2000）について、「被援助者の心の悩みの解決を援助したり、心の働きをより良くしたりするための心理的援助技法の一つ」であると説明した。また、「多くのカウンセリングでは、相談に来た人との間で“言葉”を通した言語的コミュニケーションにより対話を進めるのに対して、“動作”という非言語的な手段を媒介にしてコミュニケーションを行い、相手の心に働きかけ、やりとりを行う」（成瀬 ,2000）技法であることを説明した。おそらく、高校生にとって「カウンセリング」と聞けば「言葉」での対話をイメージする場合がほとんどであろう。しかし、動作法のように「言葉」ではなく「動作」を媒介にしたコミュニケーションの心理的支援法があることを知ることは、参加した高校生にとって新鮮であったと思われる。

動作法の概要を説明した後、話者が行った児童を対象とした動作法の実践研究（井上 ,2019）について紹介した。この研究は、小学校 2 年生、4 年生、6 年生の計 261 名を対象に、動作課題（肩の上げ下げ課題）を行い、その体験についてアンケート調査を通して結果を分析したものである。その研究結果の概要を説明したうえで、「児童にとって、簡単な動作（肩の上げ下げ）を通して、自分のからだの感覚に意識を向け、それにより感情の変容、コントロールの体験ができる」ことを説明した。

最後に、井上（2019）の実践において実際に行った「肩の上げ下げ」課題について、山中・富永（2000）のセルフ・リラクセイションを紹介しながら、その場で高校生にも一緒に体験をしてもらった（図Ⅱ-4 参照）。高校生は、目を閉じながら肩の上げ下げに取り組み、課題を通して自分の肩まわりの感覚に注意を向けている様子が窺われた。ただ、講義を聴くだけでなく、実際に身体を動かして心理的支援法の一部を経験する機会を持つことは高校生にとって意味のある時間になったのではないかと思われる。

図Ⅱ-4　セルフ・リラクセイション（山中・富永，2000 を参考）

①頭からお尻までしなやかな１本の軸となるように姿勢を作ります（安定して坐る）。
②両肩を耳につけるようにゆっくりと上げていきます。
③肩を上げたまま維持して，顔，肘，両手，その他の身体部位に力が入らないようにします。
④肩の力を「すとーん」と一気に抜きながら肩を降ろします。そのときのリラックス感を味わいます。
⑤肩の力を抜いた後も，すぐ動かないで肩の感じを感じてみましょう。

図Ⅱ-5　模擬講義　「人間の『心』を学ぶ」
井上久美子（西南学院大学人間科学部心理学科教授）

（許可を得て掲載）

2. グループワークと車椅子体験

模擬講義後、グループワークと車椅子体験を実施した。高校生は3グループに分かれ（ロの字型形式）、学生たち（社会福祉学科4年生）が司会進行の主体となった。高校生は学生生活を中心に、人間科学部での学びや資格・免許、就職活動、アルバイトやサークルなど、率直な質問を学生に投げかけていた。グループワークの雰囲気はとても穏やかで、学生は高校生からの質問に丁寧に回答していた。また、学生たちは、ソーシャルワーク演習で学んだ知識と技術を活かし、高校生に伝えたい「ふくし」も盛り込んでいた。高校生と話すことを通して、学生自身もまた、これまでの学生生活をふりかえり、今大学で学んでいる意義と専門分野を確認することができたのではないだろうか。

車椅子体験は、学生による説明後、高校生が実際に「車椅子をおしてみる」という体験をした。昨年度、西南学院中学校・高等学校は実際に「体験すること」が更なる理解や行動に繋がると考え、体験会など、主体的かつ積極的に取り組む機会を設けていた。「しょうがいを持つ人とともに生きる」というテーマで車いす体験（校内）を実施した際、高校2年生（希望者）は課題を見い出すだけでなく、解決するためにはどのようにしたらよいか、生徒自身が考えるきっかけにも繋がった。高校生からは校内設備のハード面のみならず、心理的側面に関する感想もあり、教員も実際に「体験すること」の有用性を実感している（河谷、梵、2024）。

最後のふりかえりでは、高校生からの質問に教員が回答したが「実際に講義を受けてみないとわからなかった」、「人間科学部に興味があり、これまでホームページや入学案内などの文章で知るだけだったが、学科の特徴や学ぶ領域を聞いたことで新たな気づきがあり、もっと詳しく知りたいと思った」、「心理学に興味があったが、『福祉』にも様々な分野があることが分かり、社会福祉にも興味を抱いた」、「学部内で関係する科目が多くあり、どの学科でも学科横断的に学べることが分かり、興味が深まった」等の感想も寄せられた（西南学院大学、2024a）。教室解散後も高校生は教室に残り、学生や大学教員に個別の質問をして、将来についてより深く学んでいた。

図Ⅱ-6　高校生に自己紹介を行う安武奈月海さん（西南学院大学４年：写真左）と松尾春花さん（西南学院大学４年：写真右）

（許可を得て掲載）

図Ⅱ-7　高校生に車椅子を説明する野田周佑さん
（西南学院大学４年・西南学院中学校・高等学校卒業生）

（許可を得て掲載）

3. 西南学院高等学校の視点から（西南学院中学校・高等学校 梵真沙子）

まずプログラム参加予定の高校生に「なぜこのプログラムに参加しようと思ったのか」、その動機を聞いたところ、「大学の先生の講義に興味があったから。専門的な話が聞けることが面白そうだったから」、「大学の生活について、先生や大学生から直接話を聞くことができると聞いたから」、「西南学院大学進学を希望しているから」、「どの学部にしようか進路に迷っているから」、「西南学院大学のキャンパスに入ったことがなかったから」、「これまで（他大学も含め）オープンキャンパスに参加したことがなかったから」という回答であった。

学年によってその目的は様々であったが、自分の進路選択の一助にしようとしたり、専門的な話が聞けることに興味を持っていたようである。生徒のなかには、昨年度(2024 年 3 月）実施した西南学院高等学校と人間科学部社会福祉学科の連携講座に参加したことで、今回も興味を持ち参加を決めた者もいた。

協働プログラムのはじめは、はじめに先生方による講義を受講したが、高校教員として非常に興味深く聞かせていただいた。児童教育学科・社会福祉学科・心理学科それぞれの内容や、先生方が研究されていることについて知ることができたと同時に、人間科学部全体に通じる部分（人間科学とは？）を聞かせていただいたことが大変有意義であった。

一番印象的であったのは、協働プログラムが終わってからの高校生の様子である。各々、先生や大学生に質問をしていたが、参加した高校生の半数以上が、何かしらの質問をしていた。それだけプログラムの内容が充実していて、話を聞く中で先生や大学生の「人間（ひと）としての温かさ」が伝わったからだと思う。自分の進路について真剣に考える時期とも重なった生徒は、より踏み込んだ質問ができたのではないだろうか。

プログラム終了後、高校生に改めて協働プログラムに参加した感想を聞いたところ、ほとんどの生徒が「非常に良かった」と話していた。そして「パンフレットやホームページでたびたび見てきたが、それでは分からないことも多かった。より色々なことを知ることができて良かった」、「先生方や大学生がとても優しかった」、「心理学科への進路を考えていたが、他の学科も面白そうだと思った」、「社会福祉学科でも保育士の免許が取れることは知らなかった。取

れる資格など、もう一度調べ直そうと思う」などの感想があげられた。

西南学院大学のキャンパス・教室で、大学の先生や先輩から直に話が聞けることは、高校生にとって大学への興味や勉学の意欲、また将来の不安を取り除くための安心にもつながることを改めて実感した。生徒にとって大変有意義なプログラムであったと同時に、参加した西南中学校・高等学校の教員にとっても貴重な機会で、多くの学びにつながった。高校教員がこれまであまり理解していなかった西南学院大学の様子や人間科学部・3学科の特徴と具体的なカリキュラム内容等は、今後の進路指導にも活かせることを実感している。そして、西南学院中学校・高等学校を卒業した学生の活躍も頼もしく、協働プログラムを通して、西南学院の「中高大」の教員として、お互いに信頼関係が構築できたことも大変嬉しく思っている。　（河谷はるみ・井上久美子・梵真沙子）

Ⅲ. 模擬講義「教育・ジェンダー・人権」倉元綾子（児童教育学科教授）

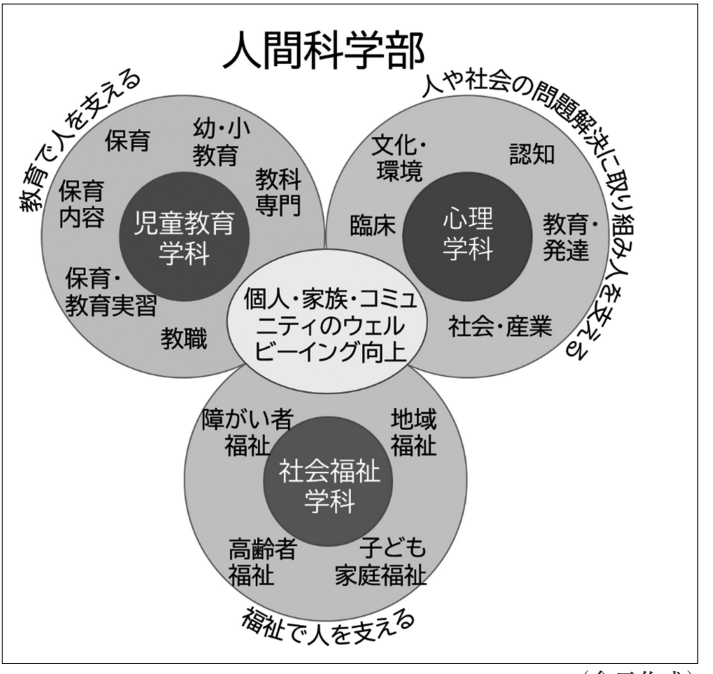
人間科学部および児童教育学科の紹介、人間科学を支える理論とモデル、ジェンダーと人権について模擬講義を行った。なお、講義で割愛した事項についても加筆・修正している。

1. 人間科学（部）とは

本学人間科学部は、「キリスト教主義による人間教育の理念に基づいて、幅広く高い教養と人間に関する諸分野の学術的成果を習得させることによって、人間の生涯に亘る成長と発達についての深い理解、他者を受容し共感する能力、ならびに地域社会、わが国と世界についての主体的思考力と総合的な判断力をもった個人を育成するとともに、とりわけ教育、保育、福祉、心理の各分野において優れた働き手として貢献しうる専門家を養成することを目的とする」（教育理念）としている。

次に、家政学および家族生活教育の知見をもとに、3学科の関係をモデル的に示していきたい。本稿では『家族生活教育：人の一生と家族（第3版）』（2019）を参考にして記述した。

図Ⅲ-1

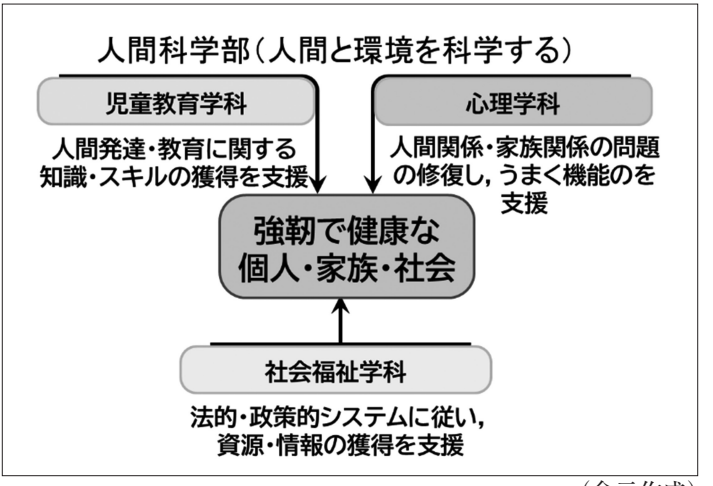


（倉元作成）

図Ⅲ-1は、人間科学部を構成する3つの学科は相互に関連して、「個人・家族・コミュニティのウェルビーイングの向上」に貢献していることを示している。図Ⅲ-1に各学科が提供している科目の概要を記した。

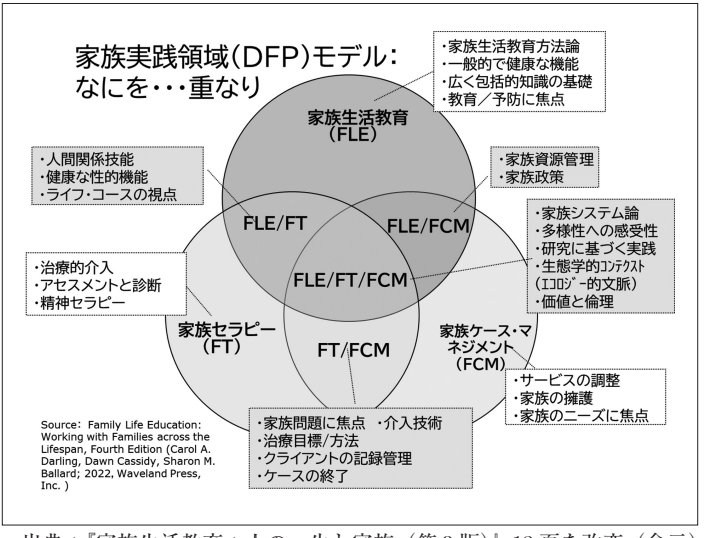
図Ⅲ-2には3学科が教育、心理、福祉を基礎に協働して、強靭で健康な個人・家族・コミュニティに貢献する卒業生の育成をめざしていることを簡潔に示した。児童教育学科では、人々が人間発達と教育に関する知識とスキルを獲得するのを支援する、社会福祉学科では、法的システム・政策的システムに従って資源・情報にアクセスするのを支援する、心理学科では、人間関係や家族関係の問題を修復し、うまく機能するのを支援する。これらの目的を実現するために、人間と環境について科学的に考究する。各学科では小学校教諭、幼稚園教諭、保育士、社会福祉士、精神保健福祉士、社会調査士、公認心理師、学校図書館司書教諭、博物館学芸員など、専門の資格が取得可能である。

図Ⅲ-2



（倉元作成）

図Ⅲ-3



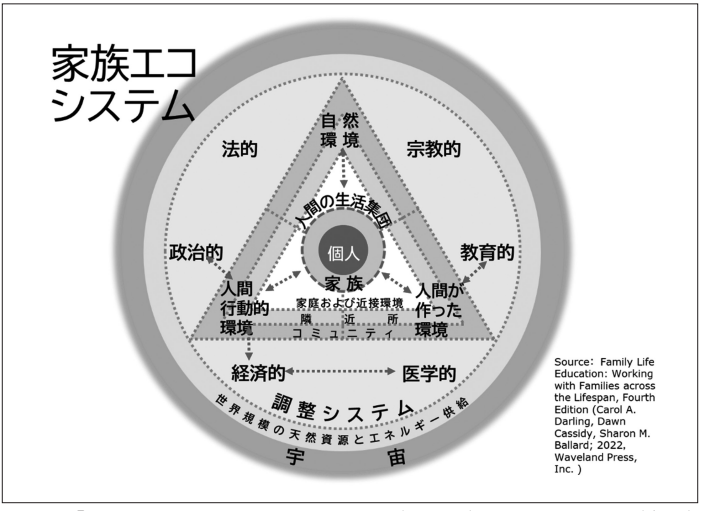
出典：『家族生活教育：人の一生と家族（第３版）』12 頁を改変（倉元）

図Ⅲ-3 には、各学科の領域が相互に重なり合っていることを詳細に示している。これらから、3 学科の協働が個人・家族・コミュニティのウェルビーイングの向上に不可欠であることがわかる。

2. 家族エコシステム：個人・家族・コミュニティの生活

以上のような考え方の基礎は、個人・家族・コミュニティとそれらをめぐる環境がエコロジカルなシステムであることへの理解である。これらの要素は相互作用しながら、日常生活の問題解決とウェルビーイング向上に結びつくように機能している。

図Ⅲ-4　家族エコシステム・モデル



出典：『家族生活教育：人の一生と家族（第 3 版）』178 頁を改変（倉元）

個人や家族の問題がますます複雑になるなかで、多面的な問題を幅広い視野で捉えることのできる枠組みが必要。人間は、環境と相互作用し「人間エコシステム」を構成する。これを家族に拡張したのが「家族エコシステム」で、家族と環境との相互作用に焦点を当てている（Allen & Henderson, 2017）。

個人・家族・コミュニティは相互依存的に機能しており、単独で独立して機能しているわけではない。人間の相互関係、人間が生活している環境全体との関係においても同様である。

家族生活教育は、家族と社会の相互関係の中で行われる。そのため、家族エコシステム・フレームワークは、家族生活教育に理解と文脈を加える総合的なアプローチを提供する（Bubolz & Sontag, 1993; Darling, 1987; Darling, Cassidy,

& Rehm, 2017; Darling & Turkki, 2009)。ブロンフェンブレンナーのバイオエコロジカル・モデル（Bioecological Model）（生物生態学的モデル）（2005）が、時間の経過に伴う人間の発達を科学的に研究するために使用されてきた。性質が似ている家族エコシステム・フレームワークは、教育環境における家族の複雑性を検討するのにより適している。

エコシステム・フレームワークには、いくつかの基本的な前提がある。まず、個人や家族は、エコシステムを構成する環境と相互作用しているとみることである（Darling, 1987; Darling & Turkki, 2009）。第 2 の前提は、家族は、そのメンバー・集団としての家族・より大きな社会にとって、ある種の本質的な物理的、生物学的、経済的、心理社会的、養育的機能を担っているということである。したがって、エコロジー的視点は、こうした多層的な機能とシステムを、時間の経過とともに相互に関連づけながら検討することを可能にするところにユニークで強力な価値がある。第 3 の前提は、世界中のすべての人が、その資源と相互依存しているということである。エコシステム・フレームワークにおける中核的価値は、人間・他の生物種・地球の資源の生存である。地球とすべての人々の全体的な幸福と健康は、エコシステム全体と切り離して考えることはできない。したがって、エコシステム・フレームワークの根底にある価値は、協力と統合を求めるエコシステムの要求と、自律と自由を求める個人の要求のバランスをはかるところにある。エコシステムの視点の基本的価値観は、個人のニーズと地球規模のエコシステムのニーズが相補的であることに焦点を当てている。理想的には、この相補性によって、個人・家族・エコシステムの発展と幸福が促進される。

家族エコシステム・モデルは、3 つの主要な概念にもとづいて構築されている。すなわち、有機的組織体または人間の生活集団（環境に囲まれた人間の単位）（human environed unit, HEU）、家族をとりまく社会環境、家族システムとその周りの環境との相互関係である（Darling, 1987; Darling & Turkki, 2009）（図Ⅲ-4）。有機的組織体または人間の生活集団（HEU）は、一体感を持ち、資源、目標、価値観、利益を共有し、アイデンティティ感覚を持つ、ひとりまたは複数の個人からなる。

人間の生活集団（HEU）は、多くの場合家族であるとはいえ、その焦点は個人や絆で結ばれた集団である。(1) 自然環境（natural environment, NE）は自然によって形成されている。時間的、空間的、物理的、生物学的要素、世界的な天然資源とエネルギー供給、変化する気象システムが含まれる。地球温暖化、太陽フレア、地球に落下する流星など、最近の事象は、宇宙に注意を向ける必要があることを示している。自然環境のこれらの要素は、家族という世界規模のエコシステムとの関連で検討されるべきである。(2) 人間が構築した環境（human-constructed environment, HCE）は人間によって変化または創造された環境で、社会文化的、社会物理的、社会生物学的要素を含んでいる。なお、HCE の一部としての調整システムには、法制度、政治制度、経済制度、宗教制度、教育制度、医療制度が含まれる。(3) 人間行動環境（human-behavioral environment, HBE）は人間とその行動によって社会化された環境で、心理的、生物物理的、社会的側面を含んでいる。

相互作用は、環境ユニット内、環境ユニット間、そして環境ユニットと環境の間で起こっている。家族は、環境における社会的、経済的、政治的、生物学的要素の変化によって影響を受け適応している。NE、CE、HBE と個人や家族との相互作用は、身近な環境、家庭内、そして近隣、地域社会、州、国、世界、宇宙といった外部を含む多くのレベルで起こっている。

ブロンフェンブレンナー（1979, 2005）はエコロジー的アプローチにおいて、個人は入れ子状になった一連の環境構造の影響を受けていると説明した。ブロンフェンブレンナーは、マイクロシステム（個人と重要な他者との直接的で具体的な相互作用を含む、個人に最も近い設定）、メソシステム（マイクロシステム内の設定間の相互作用）、エクソシステム（個人のマイクロシステムやメソシステムに間接的な影響を及ぼすより大きな社会システム）、マクロシステム（包括的な文化的背景や価値観）というエコロジー的パラダイムに、成長を続ける個人に対する時間による変化にもとづく環境システムを組み込んだ。さらに、個人の発達史（できごとや経験）とライフコースの発達への影響に、より多くの注意を払うために、クロノシステム（時間経過に伴うシステム的変化）を追加した。

エコロジー的フレームワークはいまなお発展し、改良が加えられており、家族とその構成員の発達の理論化に影響力を持つモデルとして進化している（White, Martin, & Adamsons, 2019）。

家族エコシステム・フレームワークの現代の適切で包括的な適用例として、COVID-19 パンデミック時の生活の変化を挙げることができる。コロナ・ウイルスの影響は、国によって異なるものの、世界中に及んでいる。ウイルスはあらゆる年齢の個人や家族（HEU）に影響を与えているが、(1) 人間が構築した環境（HCE）（例えば、社会的隔離、社会的距離、検査ガイドラインなどの社会的政策、家屋、マスク、人工呼吸器、ワクチンなどの物資）、(2) 自然環境（NE）（例えば、実際のウイルス、感染しているが無症状である期間の長さの影響、隔離され家族・友人・仕事から離れている時間、変異体に対するワクチン開発・製造・普及に必要な時間など）、(3) 人間行動環境（HBE）（日常的な肉親との密接な交流、孤立や収入減によるフラストレーション、過去・現在・未来に関する恐怖や不安など）がある。多くの家族は、誕生日・卒業式・冠婚葬祭・記念日といった家族の行事を、人生の区切りとして大切にしている。しかし、家族が、いつ、どのようにお祝いの儀式を変更し、病気や死に向かっている家族をケアするかという点で変化があった。

人間の生活集団（HEU）には、さまざまな規制システムが関与し、相互作用した。医療制度と医療従事者は、このパンデミックに大きな役割を果たした。教育システムは、遠隔地から参加者を指導し、学校給食を提供し、卒業式やその他の学校行事を管理する新しい方法を作り出さなければならなかった。経済システムは、企業の閉鎖、失業、政府の財政支援などにより、いくつかの大きな影響を経験している。法制度は、知事や市長からのさまざまな指示や、新しい政策や資金調達のための立法に対処しなければならなかった。宗教は、礼拝を行い、教区民のニーズに応えるための創造的な新しい方法を見つけなければならなかった。あらゆるレベルの政治体制がこの病気の管理に大きな影響を及ぼしており、さまざまな国・州・地域社会で異なる政策と結果が出ている。世界的な天然資源とエネルギー供給は、燃料費と、ある国から別の国への資源輸送に影響を及ぼしている。一方、飛行機や車の交通量が減ることで公害が減少

し、大気の質が改善され、宇宙にも良い影響を及ぼしている。

家族内の個人間の相互作用（HEU）は、家族間の距離を縮めたり、緊張や家庭内暴力の原因となったりする。HEU は HCU と相互作用し、家の大きさやそれが混雑に与える影響、病気の家族の孤立、コンピュータの使用やバーチャル・コミュニケーションとの衝突などを引き起こす。また、検疫疲れを経験したり（HBE）、レストランを訪れたり（HBE と HCE）、暖かい季節に外に出たいと望んだり、海水浴に行ったり（NE）、環境は安全に関する決定に影響を与えるかもしれない。しかし、さまざまな調整システム（HCU）は、移動を制限し、安全と自由（HBE）の間にさらなる葛藤を引き起こす可能性のある規則や政策を作り出した。COVID-19 でのマスク着用に関する緊張は、HCU と HBE の相互作用の明確な例を示している。

3. ジェンダーと人権

次にジェンダーと人権の動向にも触れておきたい。なぜなら、これらは世界的に見て、日本がさまざまな点で立ち遅れている課題の根源的要因であり、人間科学が目標を達成するうえで障害となっているからである。これらの課題を認識し、改善する取組を、個人・家族・コミュニティのウェルビーイングの向上のための教育と研究の根底に据えることが求められる。

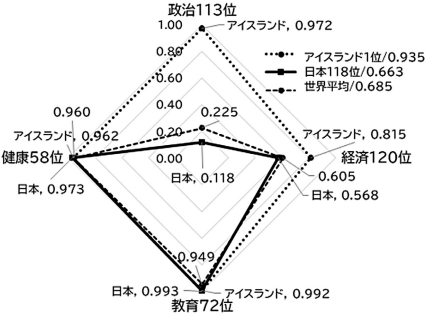
2024 年 6 月 12 日に世界経済フォーラム（WEF）は、ジェンダーギャップ指数（GGGI：The Global Gender Gap Index）を発表し、日本は 146 か国中 118 位である（図Ⅲ-5, 6）。政治分野と経済分野の指数が改善した結果、前年より総合指数が 0.016 アップし、順位が 7 位上がった。しかし、G7 では最下位、OECD38 か国でもワースト 2、東アジア・太平洋地域においてもワースト 2 という状況である。

図Ⅲ-5　グローバル・ジェンダー・ギャップ順位（2024 年）

日本の男女格差 146 か国中 118 位

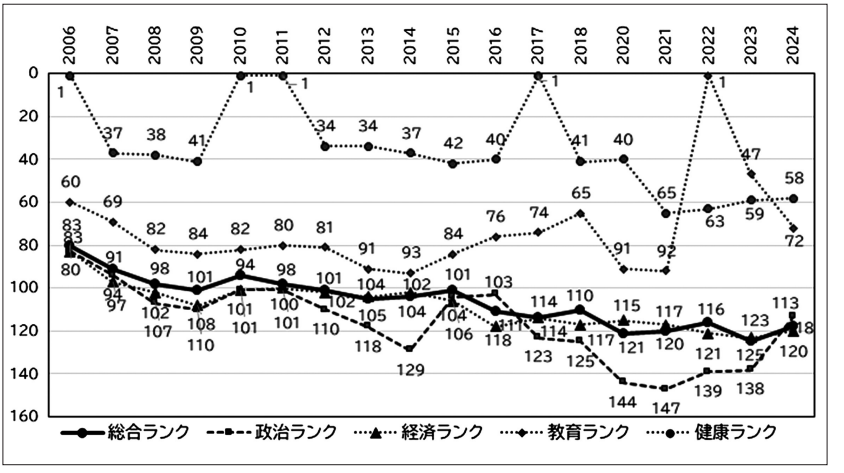
	2024 年		2023 年	
分野	ギャップ指数	順位	ギャップ指数	順位
政治	0.118	113 位	0.057	138 位
経済	0.568	120 位	0.561	123 位
教育	0.993	72 位	0.997	47 位
健康	0.973	58 位	0.973	59 位
総合	0.663	118 位	0.647	125 位
		146 か国		146 か国

（ギャップ指数は男女格差が無ければ 1.000 となる）
出典：https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2024.pdf
（2024 年 10 月 30 日閲覧）



図Ⅲ-6　日本のグローバル・ジェンダー・ギャップ指数の順位推移

日本は世界の潮流に取り残され、世界経済フォーラムが GGGI の公表を開始した 2006 年の順位から後退したままである。



出典：https://www.weforum.org/publications/series/global-gender-gap-report/
各年度から倉元作成（最終閲覧日　2024 年 10 月 30 日）

表Ⅲ-1　グローバル・ジェンダー・ギャップ指数の分野別前年比較（2023 年, 2024 年）

日本の各項目指数と世界平均 ＊平均値が確認できない項目	2024 報告書			2023 報告書		
	順位	指数	平均	順位	指数	平均
総合	**118**	**0.663**	**0.685**	**125**	**0.647**	**0.684**
政治分野トータル	**113**	**0.118**	**0.225**	**138**	**0.057**	**0.221**
女性議員(下院)比率	129	0.115		131	0.111	0.229
内閣の女性閣僚比率	65	0.333		128	0.091	＊
女性元首在任（過去 50 年）	80	0		80	0	＊
経済分野トータル	**120**	**0.568**	**0.605**	**123**	**0.561**	**0.601**
労働力比率	80	0.768		81	0.759	0.638
賃金格差	83	0.619		75	0.621	＊
所得格差	98	0.583		100	0.577	0.519
管理職比率	130	0.171		133	0.148	0.429
専門職・技術職比率	—	—		—	—	0.710
教育分野トータル	**72**	**0.993**	**0.949**	**47**	**0.997**	**0.952**
識字率	1	1,000		1	1,000	0.940
初等教育	—	—		1	1,000	＊
中等教育	1	1.000		1	1.000	0.800
高等教育	107	0.969		105	0.976	＊
健康分野トータル	**58**	**0.973**	**0.960**	**59**	**0.973**	**0.960**
出生時性比率	1	0.944		1	0.944	＊
平均（健康）寿命	68	1.039		69	1.039	＊

出典：男女格差解消を目指して：2024 年男女格差指数（GGGI）0.663 118 位 /146 か国中, 認定ＮＰＯ法人日本ＢＰＷ連合会，2024/06/12
https://www.bpw-japan.jp/japanese/dl/2024gggi.pdf（2024 年 10 月 30 日閲覧）
【政治分野】女性閣僚比率の改善（128 位⇒ 65 位）により 138 位から、113 位に順位を上げ、総合順位を押し上げる要因になった。しかし内容的には、トータル指数は 0.057 ⇒ 0.118 と 100 点満点中 6 点が 12 点になっただけで男女平等には程遠い。
【経済分野】管理職比率スコアは 0.148 ⇒ 0.171 に改善したが、これは管理職 6 人中 5 人が男性である状態であり、依然として格差は大きい。所得格差スコアも 0.577 ⇒ 0.583 とわずかな改善にとどまっている。
【教育分野】教育分野全体の指数は 0.997 ⇒ 0.993 へ、順位も 47 位⇒ 72 位へ低下した。
【健康分野】健康分野の指数は前年とほぼ同じである。
（解説は一部改変）

4. 児童教育学科とは

児童教育学科は、「キリスト教主義による人間教育の理念に基づいて教育を行い、教育・保育の分野に関する専門的知識と技能の習得を通じて、これらの分野の専門家である保育士、幼稚園教諭、小学校教諭などを養成するとともに、これらの専門的知識と技能を活かして社会に貢献しうる人間を育成すること」を目的としている（教育の理念）。

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー），ディプロマ・ポリシーについては，ウェブサイトを参照していただきたい。

学科沿革は以下のとおりである。第二次世界大戦末期に開設された西南保母学院を起源としている。長く福岡県における教育に貢献するとともに有為な人材を輩出してきた。

・1916/4：C.K. ドージャー，私立西南学院（男子中学校）創立。
・1940：西南保姆学院開設。キリスト教に基づく女子教育，ドージャー夫人モード。
・1950：西南学院大学短期大学部児童教育科開設。舞鶴幼稚園、早緑子供の園は西南学院の組織に入る。
・1974/4：文学部児童教育学科開設。
・1985/4：小学校教諭免許課程，初の男子学生入学。
・2001/4：文学部社会福祉学科開設。
・2005/4：人間科学部開設（児童教育学科，社会福祉学科）。
・2012/4: 人間科学部心理学科開設。

カリキュラム・ツリーは、学年ごとに理論を学び、実践を通じて検証して、専門を究めることができるように構築されている。また、演習Ⅰ、Ⅱおよび卒業論文では、論文検索、読解、論文記述、討論などを通じて、知識とスキルを高めるとともに、各人が設定したテーマについて研究・考察し、中間発表会や論文執筆、卒論集作成を行っている。

Ⅳ．おわりに

昨年度の西南学院高大連携講座と今回の協働プログラムは、西南学院中学校・高等学校を卒業した学生たちの協力を得たからこそ、実現することができた。発起人の学生たちは教員に「自分たちが大学を卒業しても継続して欲しい」という願いを訴えており、これからも西南学院の教員として、誠実に継続・実施する責務がある。

改めて西南学院高大連携の意義は、何であろうか。高校生にとって最大の意義は、前述したとおり「大学の先生や学生から直に話を聞くことができること」である。それでは「人間科学部」として実施した、今回の協働プログラムの意義は何であろうか。

高校生は、自ら関心のある学科だけではなく、学部3学科の内容を把握することで、学部内の学科選択肢が広がったのではないだろうか。一例として、人間科学部は児童教育学科と社会福祉学科で、保育士（国家資格）が取得できる。国家資格は同じであっても、各学科における学びの基礎・基盤（教育なのか、福祉なのか）と就職先（対象者）が異なる場合もあること、そして社会福祉学科は社会福祉士国家試験受験資格を目指す学生のみ、保育士が取得できるということ、これらは高校生に新鮮であったと思われる。

大学教員は模擬講義を考えるなかで、教育学部、社会福祉学部、心理学部ではない「人間科学部」の児童教育学科、社会福祉学科、心理学科をどのように説明をしたらよいのか、そもそも「人間科学（部）とは何か」、「どのようにしたら自分の専門分野から人間科学（部）を理解、説明することができるのか」という根源的な問いを考える機会を得ることができた。また模擬講義では、高校生にフィールドワーク（実践）の具体的な内容が「社会福祉学」という学問への説得力を持たせたことを通して、地域における様々な生活課題や地域住民のニーズの把握には、フィールドワークが大変重要であることを実感した。

なお、高大連携および高大接続は1990年代から課題提起と活動が始まり、30年以上、活動を蓄積してきているものの、課題も少なくない。これに対応して、2023年9月、日本学術会議は報告『日本における高大接続の課題：「セ

グメント化」している現状を踏まえて』(2023) をまとめた。その大意は、以下のとおりである。

高大接続とは、高校から大学への学習者の移行を促すことである。その問題領域には、入試等の構造的側面、教育内容や教育方法等の内容的側面、教員の協働や進路指導等の運営的側面の3つがある。大学と高校の現状を見ると、大学では、大学入学者定員増に伴う大学進学率の上昇とその後の大学定員未充足、入学者の資質・能力の多様化や低下が進んでいる。現在の高校卒業者の大学進学率は約55%、そのうち一般入試による入学者は約50%、しかも一般入試の科目削減が進んでいる。その結果、入試による大学教育の質保証は容易ではなくなっている。高校では、相対的に大学進学が容易になったことや、教科・科目の履修の自由化が進んだものの、卒業者の学力保障は十分ではない。それにもかかわらず、高大「教育接続」への対応は十分でない。2010年代からの教育政策は、当初、高校教育、大学教育、大学入試の三位一体改革をめざしていた。しかし、具体化するなかで大学入試に焦点化し、高大接続に関する包括的議論は進展していない。学術会議は5つの点を明らかにした。(1) 1990年代後半から2000年代、いったんは教育内容・方法や高大接続テストなどによる教育接続の提案があった。しかし、2010年代初頭からは、入試改革による接続という議論に転換し、具体的な改革は頓挫した。(2) 日本学術会議は高校の教科と大学の学問分野から「提言」や「報告」を発出してきた。新教科や教育内容の提案、学問分野にもとづく教科の性格づけ、大学入試への提案である。33の学問分野で「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」が作成された。しかし、包括的な高大教育接続の在り方の検討には至っていない。(3) 今後の教育接続では、教育内容、高校の学習（学力水準、学力範囲、教科種別など）の共通性と多様性、接続のタイムスパン（教育接続の評価を大学4年間のどの時点で行うか）の3つの次元での検討が求められる。(4) 地域、性別、高校の学科、高校の入学難易度、学習者の社会階層による進学格差があり、附属・系列高校からの進学、マイノリティへの配慮などの課題も存在する。さらに、過年度卒業者、社会人、高等学校卒業程度認定試験

経由の受験者などの移行状況の把握が必要である。現在では、教育内容・選抜方法・学習者の社会的属性などによって、高校から大学への移行パターンが細かく断片化し、多様な高大接続が並存し「セグメント化」している。(5)「セグメント化」のなかでも、一定の原則のもとに、多様性を保持するべきである。セグメント化がもたらす社会的格差の拡大と特定層の排除に対抗し、格差の縮小と包摂性の向上の追求が必要であるし、学習者の視点に立った教育機会の拡大は大前提である。各分野での教育接続に関するボトムアップ的な協議と、それにもとづく全体的高大教育接続のあり方の検討が求められる。

本学においても、これらの課題を念頭に置き、よりよい高大連携を模索する努力を積み重ねていくことが求められている。

昨年度の社会福祉学科から、今年度は人間科学部での実施と西南学院高大連携・協働プログラムはその内容も充実しつつある。これからも「人間科学（部）とは何か」という問いを立てながら、西南学院高等学校、他学部とともに横断的なテーマを設定し、西南学院としての高大連携・協働プログラムの体制づくりを目指していきたいと思う。（河谷はるみ）

謝辞：2024 年度西南学院高等学校と人間科学部の協働プログラムの実施にあたり、協力くださった西南学院大学人間科学部社会福祉学科春岡茉奈さん（4 年）、安武奈月海さん（4 年）、野田周佑さん（4 年）、松尾春花さん（4 年）、西南学院大学田代裕一教授（人間科学部長）、人間科学部教員の皆様、西南学院中学校・高等学校人権・「同和」教育委員会教職員の皆様、西南学院大学秋山典彦氏（入試・国際・教育推進部入試課）、松村聡氏（総合企画部広報・校友課）、鵜林那奈氏（教育支援部教務課）に心より感謝申し上げます。

【引用文献】

井上久美子.（2019）. 児童のペア・リラクセイションを通した身体意識性と援助者への気づき. 西南学院大学人間科学論集，14(2), 53-67.

河谷はるみ・梵真沙子.（2024）.「西南学院における中高大の連携プログラムと教育実践」西南学院大学人間科学論集第 20 巻第 1 号, 40.

成瀬悟策.（2000）.「動作療法」. 誠信書房.

日本学術会議心理学・教育学委員会 高大接続を考える分科会.（2023）.『報告　日本にける高大接続の課題：「セグメント化」している現状を踏まえて』 https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-25-h230926-6.pdf （最終閲覧日　2024 年 11 月 10 日）.

認定ＮＰＯ法人日本ＢＰＷ連合会.（2024）. 男女格差解消を目指して：2024 年男女格差指数（GGGI）0.663 118 位 /146 か国中. https://www.bpw-japan.jp/japanese/dl/2024gggi.pdf （最終閲覧日　2024 年 11 月 10 日）.

西南学院中学校・高等学校.（日付不明）. 高校での学び キリスト教教育 https://hs.seinan.ed.jp/senior/（最終閲覧日：2024 年 11 月 10 日）.

西南学院大学.（2023）.「社会福祉学科の学生と西南学院中学校の生徒による交流会が行われました」https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2023/15139.html（最終閲覧日：2024 年 10 月 29 日）.

西南学院大学.（2024a）.「人間科学部による西南学院高大連携講座が行われました」https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2024/15544.html（最終閲覧日：2024 年 11 月 10 日）.

西南学院大学.（2024b）.「社会福祉学科の教員・学生と西南学院高等学校の生徒による交流会が行われました」https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2024/15318.html（最終閲覧日：2024 年 10 月 29 日）.

西南学院大学.（2024c）.「人間科学部　田代裕一学部長挨拶」https://www.seinan-gu.ac.jp/faculty_graduate/faculty_department/human_science/social_welfare.html（最終閲覧日：2024 年 11 月 10 日）.

山中寛・富永良喜 編著.（2000）.「動作とイメージによるストレスマネジメント教育 基礎編」. 北大路書房.

Allen, K., & Henderson, A.（2017）. *Family theories: Foundations and applications*. John Wiley & Sons.

Bronfenbrenner, U.（1979）. *The ecology of human development*. Harvard University Press.

Bronfenbrenner, U.（2005）. *Making human beings human: Bioe-cological perspectives on human development*. Sage.

Bubolz, M., & Sontag, S.（1993）. Human ecology theory. In P. Boss, W. Doherty, R. LaRossa, W. Schumm, & S. Steinmetz（Eds.）, *Sourcebook of family theories and methods: A contextual approach*（pp. 419-448）. Plenum Press.

Darling, C. A.（1987）. Family life education. In M. Sussman & S. Steinmetz（Eds.）. *Handbook of marriage and the family*（pp. 815-833）. Plenum Press.

Darling, C. A., & Cassidy, D.（Eds.）.（2014）. Family Life Educa-tion: Working with Families across the Lifespan, Third Edition. Waveland Press, Inc.（邦訳：倉元、黒川、片田江、泉訳. 〈2019〉. 家族生活教育：人の一生と家族　第 3 版. 南方新社）

Darling, C. A., Cassidy, D., & Ballard, S.（2022）. *Family Life Education: Working with Families across the Lifespan, Fourth Edition*. Waveland Press, Inc.

Darling, C. A., Cassidy, D., & Rehm, M.（2017）. Family life edu-cation: Translational family science in action. *Family Rela-tions*, 30, 742-752.

Darling, C. A., & Turkki, K.（2009）. Global family concerns and the role of family life

education: An ecosystemic analysis. *Family Relations*, 58, 14-27.
White, J. M., Martin, T. F., & Adamsons, K. (2019). *Family theories: An introduction, Fifth Edition*. Sage.
World Economic Forum. (2006-2024). *Global Gender Gap Report 2006-2024*.

【参考文献】

竹内良知・垣田宏治訳『人間の科学叢書 人間科学の諸理論』(白水社、1974 年)
筒井健雄『人間科学』(三一書房、1975 年)
中島義明・井上俊・友田泰正編『人間科学への招待』(有斐閣、1992 年)
波多野完治訳『人間科学序説 ジャン・ピアジェ』(岩波書店、2000 年)
滝内大三・田畑稔編著『人間科学の新展開』(ミネルヴァ書房、2005 年)
大岳美帆『なるには BOOKS 大学学部調べ 人間科学部 中高生のための学部選びガイド』(ぺりかん社、2022 年)
大阪大学人間科学部・人間科学研究科創立 50 周年記念事業委員会 50 年史編集部会『大阪大学人間科学部 50 年史』(大阪大学人間科学部、2022 年)
原慶介「高大連携事業 これからの高校福祉科と高大連携　留学生との交流から」(ふくしと教育通巻 39 号、2024 年)
大阪大学人間科学研究科／人間科学部「人間科学とは」
https://www.hus.osaka-u.ac.jp/ja/content/about_hus.html
(最終閲覧日：2024 年 10 月 29 日)

西南学院大学人間科学部児童教育学科・社会福祉学科・心理学科